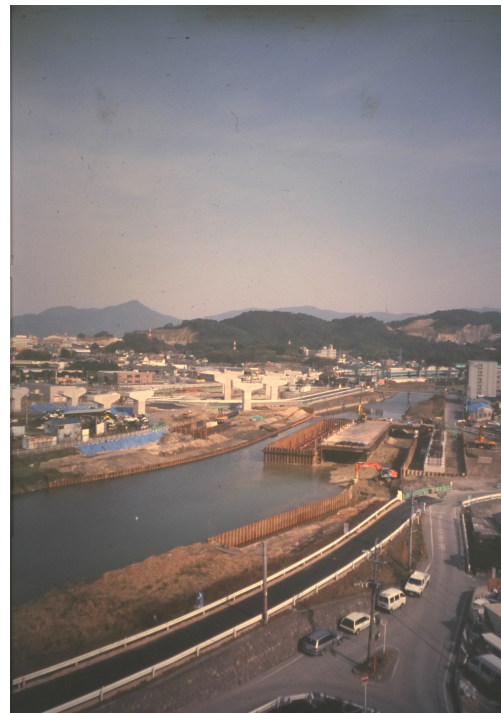


rhythmdesign

展覧会に寄せて



22歳の時に撮影した環状線計画区画
(2000年/福岡市博多区月隈)

父は大工を生業にしていました。設計から材料加工、施工まで、家が完成するまでのあらゆることを一人でこなす父の姿を幼い頃から見ていました。父と施主との関係は、委託者と受託者という間柄を超えた信頼で結ばれているように見えました。つくることの全体性を通して育まれる、特有の人間関係に憧れながら私は育ちました。

1990年代末、生まれ育った地元の真ん中を貫くように、環状道路が通ることになりました。見慣れていた家並みは次々と空き地になり、そこに巨大な支柱がいくつも建築されていきました。当時大学生だった私は実家に父母と住んでいました。私の幼馴染の家も転居することになり、その親が新居の建築を依頼してくれました。その案件で初めて、父と施主がトラブルになるのを見ました。不信感は周囲にも蔓延し、些細なボタンのかけ違いから、地域の人たちが二つに割れるような騒動になりました。環状道路が土地だけでなく人間関係も分断してしまったように思えました。それ以来、父は家を建てなくなっていきました。

都市計画（デザイン）に暴力性を感じ憤っていた私は、これを大学の卒業設計のテーマに据えました。地元住民の繋がりはどうすれば破壊されなかったのか？ この問題意識に対し建築によって光を射すことはできるのか？ しだいに、憤りや懐古では良い未来を生まないと考えるようになりました。都市デザインも大工の仕事も、ともに「考え、つくる行為」です。どちらも肯定することはできるのではないかと。

この体験を携えて2004年に自身のスタジオ『リズムデザイン』を始めました。同年に始めたデザインイベント『デザイニング展』という活動は、その後10年間続くこととなります。ジャンル、世代、ジェンダー、プロ、アマチュア問わず、あらゆる境界を超えてデザインについて議論したい、という自主活動でした。「プロセスや体験を共有し、共に学ぶ」ことによって、よりよい状況をデザインすることを目指しました。そこで得られた一定の実感と確信は、その後のリズムデザインにとって根幹となっています。本展覧会『With Others』は、私とリズムデザインの20年間の総覧する企画です。そのタイトルの通り「他者を肯定しともにつくること」を重視してきた自分たちの活動を、文脈ごとに編集しました。私たちにとって、自分たちと他者は溶けあっており、つくることと考えることは未分化です。思えば、大工であった父の仕事はまさにそのようなものでした。

タイトル With Othersについて

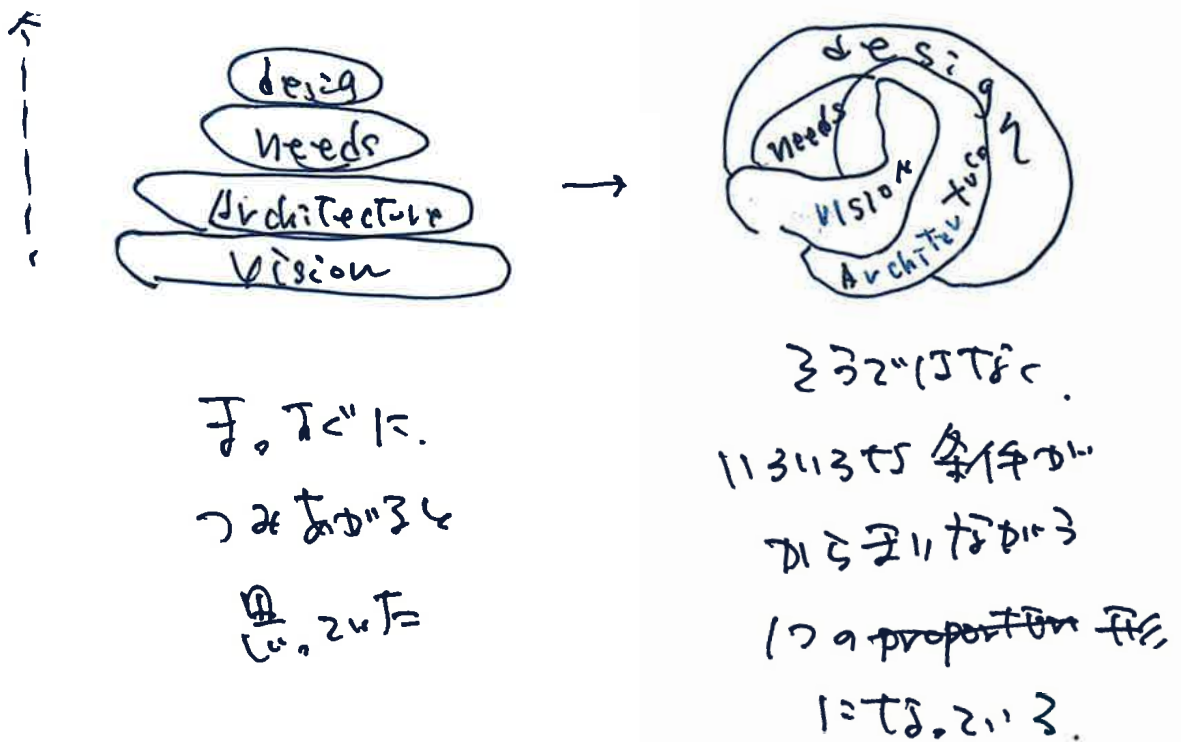
20年を節目に展覧会と書籍を企画した際、当初は「リズムデザインの20年 展」というタイトルのみで良いと考えていました。しかし、それでは私たちの姿勢が共有できません。そこで、数ヶ月かけてタイトルを考えました。

「With Others」とは、「For Myself」の対義語として導き出した言葉です。他のだれかといっしょに。デザイン行為には常に他者が含まれますが、自分を含む他者と積極的に関わり合う働きとしてデザインを捉えたい。その姿勢を「With Others」という言葉に込めました。

建築家やデザイナーの展覧会や作品解説にはよくコンセプトが添えられています。創作とともに語られるコンセプトはたいてい、その創作を高次に位置付ける効果を期待されているようです。ここに大きな違和感があります。デザインという働きを語る時、カッコ書きにまとめて自らに引き寄せられるのではなく、他者に可能性を開いていく姿勢でありたいと思います。「With Others」という言葉がそのように響けば幸いです。

この展示は、私たちと他者との対話の履歴でもあります。対話とは、観察し共有し合う双方向の働きです。プロジェクトに関わる全ての生活者と「目線を合わせる」ことです。プロジェクトに関わらない遠くの生活者と目配せを交わすことです。創作は対話であり、次の創作のためのきっかけである。そのようにして人々の働きは共有され、たくさんの文脈が巡っていく。人間の住まいや建築の歴史から見れば、デザインもコンセプトも圧倒的に歴史が浅く、後発的なものです。そうしたことよりも、自分たちの費やすエネルギーがどのような働きになるのかを考えていきたいと思います。

リズムデザイン



企画段階で描いた設計のイメージ ©rhythmdesign

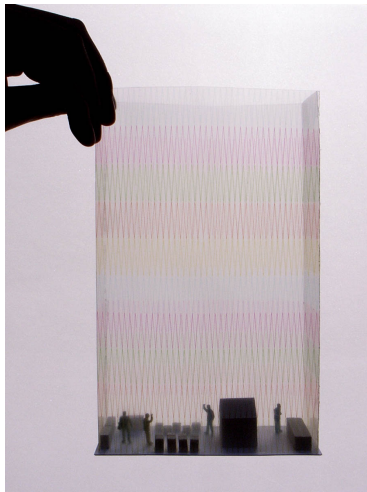
展示構成 [27の文脈]

- 01 生活者こそ設計者
- 02 当事者はだれだ
- 03 街の人が街を語る
- 04 生きた言葉
- 05 アイデンティティのバトン
- 06 先行するもの
- 07 紙一重の景観
- 08 そこだけにある景色
- 09 色や模様の記憶
- 10 地形と接する態度
- 11 土は履歴
- 12 風景の背後
- 13 見方は変えられる
- 14 結果として美しい
- 15 素材が伝える文明度
- 16 協働する喜び
- 17 孤独な試行錯誤
- 18 デザイナー不在の設計
- 19 参加の設計
- 20 その仕事のゆくえ
- 21 柔らかな骨格
- 22 軽やかなマテリアル
- 23 葛藤と強さ
- 24 ふつうのこととして
- 25 フォームは単純でいい
- 26 1分の1の対話
- 27 未来へ開きなおす

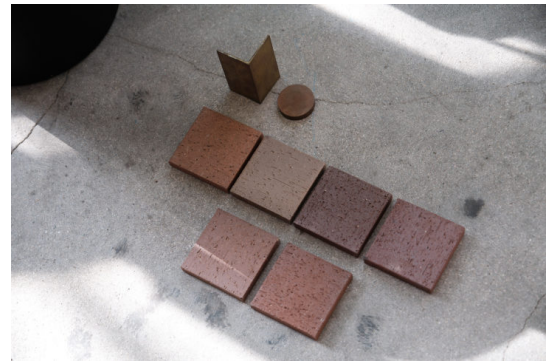
広報用図版



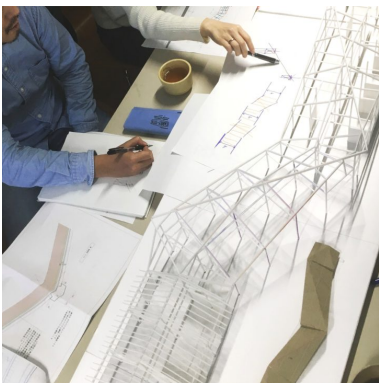
展示03 街の人が街を語る [Photo]
©rhythmdesign



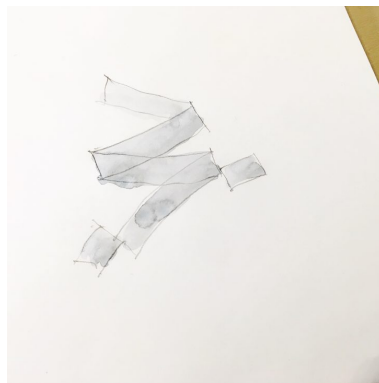
展示22 軽やかなマテリアル [Model]
©rhythmdesign



展示08 そこだけにある風景 [Object]
©rhythmdesign



展示21 柔らかな骨格 [Model]
©rhythmdesign



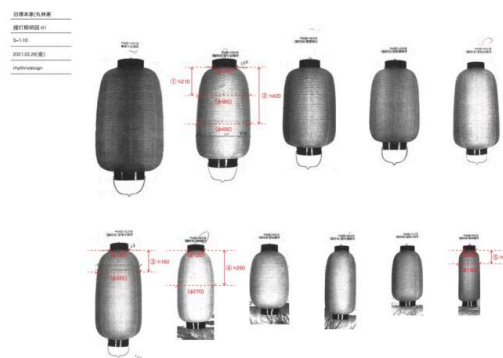
展示10 地形と接する態度 [Sketch]
©rhythmdesign



展示19 参加の設計 [Model]
©rhythmdesign



展示11 土は履歴 [Object]
©rhythmdesign



展示20 その仕事のゆくえ [Drawing]
©rhythmdesign



展示09 色や模様、記憶の痕跡 [Model]
©rhythmdesign

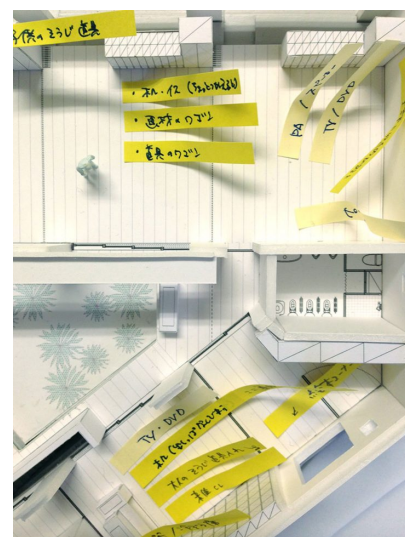
広報用図版



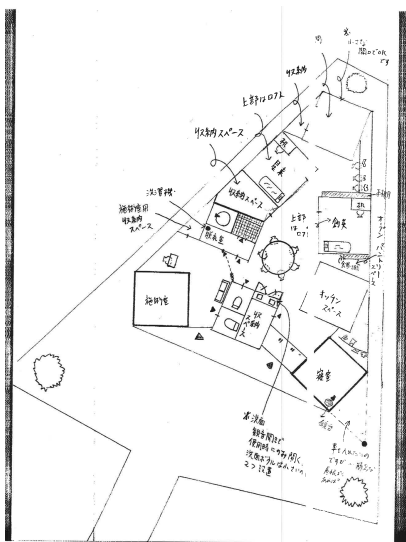
展示20 その仕事のゆくえ [Photo]
©rhythmdesign



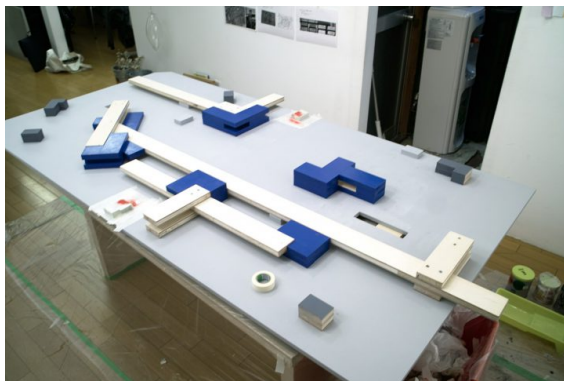
展示05 アイデンティティのボタン [Book / Letter]
©rhythmdesign



展示02 当事者はだれだ [Model]
©rhythmdesign



展示01 生活者こそ設計者 [Fax]
©rhythmdesign



展示19 参加のデザイン [Object]
©rhythmdesign



展示13 結果として美しい [Object]
©rhythmdesign